

運良をば開山とせられ、一千餘の衆徒圍繞すと記録等に詳かなり。と見ゆ。普門禪師の地藏應驗新記に云ふ。曩年佛林慧日禪師、既に鷲峰開山法燈國師の印を佩びて、復に北微に來り、勝地を揆トせんと欲して、河北郡の山林に經遊す。榛莽途に塞ぎて、人跡殆ど希なり。山行一里餘長井谷村に至る。尖頭の茅舎あり。師彼に至れば一人の女紡績して居けるが、驚き睨て曰く、僧何ぞそれ此處に來れるや。吾が夫は山賊なり。鷲奪の爲に他に適けり。歸り來らば生命惟危し。其の林中に地藏堂あり、此に行きて身を藏し給へと念頃に指教す。師尋ね行けば、荆杞の中傾斜せる茅堂に石像の地藏尊を安す。師乃ち對談して日くれぬ。彼の山賊家に歸り、物色して其の所以を問ふ。婦實を以て答へけり。此の者を逐うて彼の堂に至り覬覦れば、譚論の聲林梢に響然して、何れを其れとも分辨し難ければ、其の實を驗試せんと欲して、佩力を抜きて暗中にこれを斬る。翌朝來看れば、禪師自若として端座し給ふ。地藏の鼻端に刀の痕あり。渠大に懺謝し、即ち髮を剃り、弟子と爲りて隨侍す。師此の地に精藍を建つ。今の瑞應山傳燈禪寺是なり。其の傍に堂

宇を營構して、地藏尊を鎮守と稱す。神異無量也と。師の本傳に此の事を缺如すといへども、古今昌氓の傳ふる處、口碑確乎として猶いまだ泯せずと云々。また傳説に云ふ。右山賊は名を惡四郎と云ひ、剃髮して至庵と云ふ。禪栖院を建立して爰に居し、後傳燈寺の二世と成り、文和三年四月圓通佛眼禪師と勅號を賜ひけりと。

○妙藥山高岸寺

法華宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開祖妙覺院日饒。天正十五年高島石見守・岡木工創立。最初高島石見守石川郡白山に居城之頃、白山に建立。其後金澤に引越、石見下屋敷之内住居仕處、高島木工預り鐵炮衆屋敷割出之地有之に付、木工申立寺地に拜領仕處、其後御用地に相成、替地泉野寺町に而拜領移轉仕。とあり。右開祖日饒は、高島石見守定吉の弟なるよし、高島譜に記載す。按するに、高岸寺元寺地は今の諏訪神社の地なるを、寛永十三年九月彼の社地と換地し、慶安・承應に至り地續きなる泉野の村地を請込みたるよし、寺藏の舊記に見えたり。其の文如左。

諏訪屋敷面、三十七間裏川岸迄三十三間、爲其替地而高岸

寺屋敷面、十四間二尺五寸裏川岸迄十九間之屋敷、其上之おひとして銀子六百目儲に請取、永代迄替申處實正也。於以來相違之儀少も御座有間敷候。爲其後日之請文如件。

寛永十三年丙子九月十七日

長藏院吉思印

法華宗高岸寺様 參

おろし申畑之事

御寺之籬の外三百歩之處、直段一步に付四厘五毛也。合銀子十三文目五分也。但取込に相定申處實正也。永代迄相違御座有間敷候。爲其書付進上仕候處如件。

慶安三年庚寅曆三月廿一日

泉野肝煎 加藤嘉兵衛印

高岸寺様上

おろし申畑之事

御寺籬の外最前三百歩、承應元年より重而百歩、以上四百歩之處、直段者一步に付四厘五毛、合銀子十八文目也。但取込に付相定申處實正也。永代迄相違御座有間敷候。爲其書付進上仕候處如件。

承應元年十一月十四日

高岸寺様上

泉野肝煎 加藤嘉兵衛印

○權越高島氏傳話

三壺記に云ふ。高島左京大夫の先祖は、鎌倉將軍の時鎌倉より尾張へ來り、同國山田郡高島に居住し、高島氏を稱號とし、武衛家に隨從しけり。左京大夫が子高島左門吉光の時、織田家の家人と成り、左門が妹は前田家の元祖利家卿の内室と成り給ひけり。左門の子息孫十郎、後織部といふ。石見守定吉是なり。則ち利家卿の御妹姫なりけり。高島氏の先祖、鎌倉にて日蓮沙門と懇切なるが故に、日蓮身延山建立の時取持をなしたり。故に破損修理の時、高島左京大夫黒漆の圓柱六本を寄進せられ、六人の子供達の榮久を祈願せられけりとぞ。依て高島一門中悉く法華經の信徒なりけり。信長公の時、安土にて日蓮宗と淨土宗との宗論ありて、日蓮宗負けしゆゑ、其後高島の一類共宗旨を替ふるに付、身延山に是を憤る由聞えければ、また法華に立歸る者もあり。高島久兵衛・同茂助其の外高島權兵衛・同新兵衛、ケ様の人々皆左京大夫兄弟の末なり。また石見守定吉に九